

令和4年度(2022年度) 学校評価総括表 【伊丹市立緑丘小学校】									
教育目標		人間性豊かな、たくましく生きるみどりの子の育成							
重点目標		①「確かな学力」を育むために ②「豊かな心」を育むために ③「健やかな体」を育むために ④安全で安心な学校づくり、環境整備 ⑤開かれた学校づくり ⑥教職員の働き方改革について ⑦生徒指導体制づくりのために							
主要施策	施策目標 基本施策	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価	
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携	①「思考力・判断力・表現力」の育成を図り達成感を味わい粘り強く学習できる力の育成 ・共に学び合う楽しさを感じさせる授業による学習意欲の向上 ・読書活動の充実 ・基礎・基本の確実な定着により自ら学ぶ意欲の向上 ・どの児童もわかる授業の創造 ③家庭学習の充実	①課題解決のために、対話の中で思考方法や表現方法を意識させる。 ・他者との対話を通して得られた考えをもとに、自分の考えを深めたり、広げたりする。 ・授業前の読書タイム及び図書の時間を週1回設ける。読書記録カードに記録する。 ・4年生以上は、読んだ本のページ数を読書記録カードに記録する。 ②ミニプリントの活用・少人数授業を実施し、基礎・基本の定着、学力の向上を図る。 ・課題を工夫したり、具体物を操作したり、表現方法を工夫したりする活動を取り入れる。 ③1・2年生は30分、3・4年生は60分、5・6年生は90分を目標とした家庭学習に取り組む。	①学年に応じた思考の方法を示す。話し合う目的や視点を明確にする。 ・理由・根拠を明確にして、自分の考えを相手に伝えようとする。 ・読書活動を充実させ、学校図書館開館期間中一人あたりの月平均貸出冊数が7冊を超えることをめざす。 ②「国語力の向上をめざし、「ことばの学習」の時間(3～6年生)を年間30時間実施する。 ・わかる授業づくりを工夫し、児童アンケートにおいて「授業は、わかりやすく楽しいですか。」の回答が90%以上をめざす。 ③児童アンケートにおいて、学年目標を達成した児童が80%以上になる。	B	①話し合う目的や視点を明確にして話し合いをさせることができた。 ・学年に応じた思考の方法を明確に示すことができなかった。 ・児童学習アンケート理由をはっきりさせて、自分の考えを伝えることができた。の回答が、87.3%であった。 ・児童アンケートでは、「朝の読書タイムや図書の時間にすんで本を読もうとしていますか」の回答が、83.8%と昨年と比べて約6%減少している。これは、朝の読書タイムが、モジュール学習になって、読書の時間が減少したことにも原因があると考えられる。1人あたりの月平均貸出冊数は、6.8冊と目標をやや下回っている。 ②ミニプリントや復習プリントを活用し、基礎・基本の力をつけることができた。タブレットでの課題を導入し、児童の実態に応じて取り組ませることができた。 ・児童アンケート「授業はわかりやすく楽しい」の回答、86.9%で、昨年度より評価が下がり、90%以上は達成できなかった。 ③児童アンケートでは、「家庭学習をよくしていますか。」の回答が79.9%とはほぼ目標値だった。昨年と比べて約11%も減少していたが、今年度から学習時間を明記したことによるものだと考えられる。	①低・中・高学年の系統的な思考の方法を考へていく。 ・引き続き、児童の実態を把握し、対話を通して学びを深めるための手立てを研究していく。 ・教師が意識して読書の時間を設定する。図書の時間はこれまで同様1週間に1時間設ける。また、読書記録カードの取り組みも続けていく。	・昨年度より回答率が低下している項目が目立っている。教育環境が低下していないかを見極めていかなければならない。
		新しい時代に対応した教育の推進 ①情報活用能力の育成 ②英語教育の充実 ③デジタル化の促進	①学年に応じた情報活用能力の目標を設定することにより、児童自身が到達度を自己評価することで、情報モラルや適切な活用を意識させる。 ②専科教師・ALT・JTEを活用し、コミュニケーションを取り入れた内容をも積極的に扱う。また、書く内容も取り入れ英語力の向上を図る。 ③ICT機器の活用を取り入れたわかる授業の創造や、タブレット端末の活用した学習支援の充実を図る。	①学年に応じた児童の情報活用能力のチェックリストを作成し、目標の達成度や課題を確認することができる。 ②会話を取り入れた活動や、デジタル教材・ICTを活用することで、楽しく意欲的に取り組むことができるようになる。 ③学習支援アプリやAIDLを活用し、オンラインの学習にも意欲的に取り組むことができるようになる。	B	①情報端末を使用する回数が学校全体で増えたことで、学年に応じた情報活用実践力がついてきた。チェックリストによる自己評価に挑戦したが、児童が自分の得意な分野や課題を実感することが難しかった。 ②専科教師・ALT・JTEを活用し、学年ごとに、実態に応じた内容を取り入れた学習を行うことができた。高学年に関しては、もう少し積極的なコミュニケーションに取り組めるようになればと感じる。 ③「リドルパネット」を市内に先がけて実施し、使用頻度が全国一位となった学習支援アプリやAIDLを活用することで、積極的・意欲的に教科の学習に取り組むことができた。	①チェックリストによる自己評価を活用し、引き続き自身の課題や、得意な分野を実感することで、さらなる情報モラルの理解や適切な活用につなげる。児童の実態に合わせて、チェックリストの更新も行う。 ②ICTなどを活用し、積極的に外国語でのコミュニケーションに取り組めるよう、さらなる機会を設定していく。 ③AIDLは、様々な教科や内容に対応できるように、つなぐ力に合わせて教科や内容を絞って活用していく。引き続き、ICT機器の活用を取り入れた授業を創造していく。	・モラルの問題が、ネットでも問題となっている。子ども、保護者、教員を対象とした研修は、その都度何度か継続して実施していく必要がある。 ・デジタルリドルの使用頻度が、全国一位となったことは、自信にかなげる取組の一つとして評価できる。	
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けた組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	①「命を大切にし、思いやりに満ちた子の育成」 ・基本的生活習慣の定着(生活指導の充実) ・みどりっ子のきまりや月間生活目標、緑くしぐさ「あはれ」の推進を図る。 ②1年に2回、アンケート調査を実施し、教育相談を行う期間を設け、実態調査を行う。 ・事例に応じ、職員全体で共通理解し、対応する。 ③不登校支援員を配置し、授業を進めながら不登校児童に対応できるようにする。また、不登校児童へ担任からや支援員からのアプローチと幅を広げることによって、児童にとっても話しやすい環境を設定する。 ④感染拡大防止に努めながら、児童の発達段階に応じたさまざまな体験や集団活動の実施	①「道徳、人権の授業後の感想で、自分を大切にしたり、相手の心情を考えた」などの感想が深まりが見られる。 ・きまりを守り、児童アンケートにおいて、「月間生活目標を守って生活できている」と回答した割合が80%以上になる。 ・緑くしぐさ「あはれ」を意識して行動し、安全な生活できるようになる。 ②「学年で児童の実態を共有し、今後の対応を検討する機会を大切に」する。 ・児童の実態を話し合う場を月1回以上設定する。 ③不登校支援員を実態に合わせて、適切に配置し、児童にとって過ごしやすい環境を整える。 ④感染拡大防止に努めながら、普段とは違う生活環境の中で、春と秋の社会見学などで、文化や自然に親しみ、公衆道徳や望ましい集団活動を経験することができる。	B	①児童アンケートの「自分のクラスはお互いの良いところやがんばっているところを認めあうことができていますか。」については、90.6%と高い結果になっている。しかし、「自分には良いところがあると思いますか。」の結果は、77%と他の項目に比べて低い結果となっている。そのため、自尊心を高める教育活動の推進を今後も行う必要がある。 ・児童アンケートの結果は、80.8%で当初の達成目標はクリアし、昨年度同様の結果が得られた。職員への周知も徹底することで意識して取り組む児童が多くなった。一方、「あはれ」を月別目標に組み入れたが、今一度今後の取り組みの改善が求められる。 ②アンケートを実施することにより、児童の実態を把握し、小さなうちに迅速に対応することができた。一方で、対応が遅れたケースもあり、引き続き言葉「初期対応」その日のうちに「報・連・相」を大切に、職員全体で取り組んでいく必要がある。 ③別室を設置することで登校が増えた児童もいた。不登校支援員を活用することで、当該児童へのアプローチを広げることができた。過ごしやすい環境を整えることができた。 ④校外学習で行った今までの感染防止に向けた対応を、コロナ対策委員会などで取り上げて事前に準備することで、安心・安全に実施することができ、児童たちの体験や経験を広げることができた。	①自己肯定感、自己有用感を高める教育活動の推進を引き続き行っていく。 ・どうとく等を活用し、道徳教育の必要性を保護者に啓発するとともに、学校と家庭の協力体制を進めていく。 ・教師自身も、リフレーミング練習(肯定的な言葉かけ)をしていく。児童の見本となるように心がける。 ②毎月行っている相談部の定例会での児童の様子との情報交換を今後も継続していく。また、ミーティング会議も開催することで、子どもへの関わり、事業への対応を全職員で組織として、取り組んでいく。 ③引き続き、不登校児童へのアプローチ方法を様々活用し、対応できるようにしていく。 ④引き続き、今後の社会状況の変化に対応し、計画や実施していく。校外活動の先行きや宿泊場所の見直しなどを検討していく必要がある。	・日本人が活躍する世界的スポーツイベントを、教育課程内で見せることも、子どもの感性を育てることになるのではないかと。土曜学習なら、授業に関係なく子どもたちを集め、体験させることができ。 ・生を受けていることへの感謝や、両親への感謝など、基本的な精神のようなものを言葉に伝えたい。	
		「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力あるクラブ活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	①健康な体づくり・体力向上 ①「健康な状態で活動できるように、健康観察を行うとともに、健康を意欲して生活できるように「ほけんだより」を用いた保健指導や、児童保健委員会による、保健広報活動を行う。 ・-業間休みに多くの児童が外に出られるように、体育委員会を通して、遊びの企画を行う。 ②今年5月、5、6年生を対象に行う。 ③栄養教諭による「食の指導」を実施する。さらに、給食センターから送られる食に関する掲示物を掲示する。 ・「食育だより(一言コメント)」を掲示するなどして、活用する。 ・給食委員会による全校生への広報活動を行う。	①「健康観察を毎日1回行う」。「ほけんだより」を用いて、保健指導を月1回実施する。 ・児童保健委員会にて年2回以上、健康な生活についての広報活動をする。 ・「休み時間、外で遊ぶ」とアンケートに答える児童が75%になる。 ②目標に向け、活動を積極的に行う。 ③季節の食材を知ったり、栄養について考えたりする。	B	①登校後、スクールタクトの健康観察表で健康観察を毎日行っている。 ・「ほけんだより」に記入する欄を作って配布しているので、配布時に学級指導後、記入してか持ち帰っている。去年より学級指導している事が上昇している。 ・保健委員会、ポスターや保健委員会だよりを作った。怪我調べをして注意する点などをビデオを作って全校集会で放送した。点検時実施して手洗い実演し、全校生にスクールタクトで配信し周知を図った。 ・「休み時間、外で遊ぶ」という児童アンケートの結果は、73.8%であった。 ・ドッジボール大会、短距離大会、ふえおに大会は今年度は実施し、外遊びのきっかけを作った。 ②活動内容を考え、実施することができた。 ③「栄養教諭による「食の指導」を実施した。さらに、給食センターから送られる食に関する掲示物を、2階廊下に掲示した。 ・委員会の活動では、一言コメントの内容をポスターにした。各フロアの掲示板上に掲示し、啓発した。また、朝食を摂るために「置き残し」の活用を実施したり、食器の置き方や運び方を呼びかけのために立ち当番を行ったりした。 ・放送委員会協力してもらったり、栄養教諭に相談してもらったりして、食育放送を行った。	①引き続き学級で、健康観察を続けていく。 ・「ほけんだより」は今年度同様、配布する前に学級指導後、記入する形を続ける。児童の保健委員会が全校生へ健康について呼びかける活動を続けていく。 ・体育委員会での活動を通じて、外遊びの促進を図る。 ・本校は、5、6年生スポーツテストから投擲が苦手である。来年度は、投げられる遊びができる教具を購入し、年間カリキュラムの中で、サーキット運動での「投げ運動」を取り入れる。 ・来年度5月までに、スキルアップ研修で、体育の授業でできる「投げ」の運動について理解を深める。 ②引き続き、子どもたちから行いたいクラブ活動のアンケートをとり、自発的に活動できるクラブ活動の実施を行う。 ③季節の食材や栄養、給食に興味をもってもらえるように、給食委員会を中心に全校生へ引き続き伝えていく。	・やった結果に対して、何をしなければならぬかを考え、素早く対応できない。	

学校教育	教育相談・支援体制の充実	①自分らしさを発揮し、自ら学び、考え、行動できる児童の育成 ②児童・保護者の困り感に早期に寄り添うことのできるSC・SSWの活用 ③教育相談の充実	①キャリア教育で目指す4つの資質能力についての系統性を明確にする。 ・各学年の教科などの年間計画に4つの資質能力について書き入れ、どの単元などの能力の育成を目指すかを明確にする。 ・キャリアパスポートを活用し、振り返り、自己評価をすることで、新たな学習意欲を高めたり、将来の生き方を考えたりさせる。	①人間関係形成、社会形成能力・自己理解、自己管理能力・課題対応能力、キャリアプランニング能力の4つの重点的な資質能力について、各学年に応じた姿が見られる。(例) ・他者との関わりや自己理解について、教科や行事を通して学び、他者と協力して何かを行ったり、自分の良さについて知ったりすることができる。 ②夏季研修において、ストレスチェックから読み取れること、生かし方を学び、早期に児童の困り感に寄り添えるようになる。 ③支援が必要な児童の実態の情報を校内で共有し、支援体制を整え、引き継ぎすることで、児童の支援を充実させる。	B	①各教科とのつながり、どの単元での資質能力を育成するのかが明記することで、教科の目標以外にも、児童につけたい力を意識して学習させることができた。 ・キャリアパスポートを活用することで、新学年のめざす目標を整理し、自己振り返ることによって、気持ちを新たに、日々の活動や学習に前向きに取り組む姿が見られた。 ・キャリアパスポートの活用により、年度途中で、保護者や児童を対象に向けた見直しを待つことができていた。 ・キャリアパスポートを記入する、年に数回しか、自分自身について振り返る機会を持っていない。 ・キャリア教育において、子どもたちに付けたい能力(人間関係形成、社会形成能力・自己理解、自己管理能力・課題対応能力・キャリアプランニング能力)について、子ども自身の振り返りの場がないため、子どもたちの自己評価の場を確保する必要がある。 ・SCへの事前の情報提供が不十分なままSCに付いたために、保護者の継続的なカウンセリングができていない。 ③SSWが保護者支援の電話を継続できた。 ・年度初めに、職員に相談できる機関、流れなどを周知することによって、保護者からの相談に的確に答えることができた。 ・保護者からの相談・教員の気づきから、巡回相談や医療心理相談などに、児童に合った学習方法・学習環境などを校内で整えることができた。 ・個別指導計画を作成し、次学年・進路先に引き継ぎを行った。	①特別活動における、学期ごとに行う振り返りの際に、キャリアパスポートを活用する。 ・子どもたちに付けたい4つの資質能力について、児童にわかりやすい具体的な言葉にし、アンケートをとるなど、児童自身の自己評価の場を設ける。 ②SCへの情報提供として、SC予約ファイルに「日々の様子」の資料を添える。 ③引き続き、支援の流れや関係機関への情報を職員全体に共有できるように、研修に努める。 ・引き続き、児童一人一人に目を配り、児童の困り感に気づき、個に応じた学びの場を提供できるように校内の体制を整える。 ・引き続き、個別指導計画を作成し、保護者や進路先と面談を通して児童の実態を伝えていく。	・子どもたちに、将来につながるような体験活動や、実物に触れる経験をさせてあげてほしい。
	特別支援教育の推進	①支援が必要な児童のための指導内容・支援方法の相談 ②共に生き、共に学ぶことを通じた、違いを認め合う学級、学校の実現	①支援が必要な児童の困り感・手立て等を伊丹特別支援学校のコンサルテーションを通して学ぶ。 ②交流学級を学校生活の基盤とする。 ・交流学級担任と特別支援学級担任が、連絡を密にし、意思疎通を図る。 ・特別支援学級では、交流学級や地域での生活を豊かにすることができるよう指導する。 ・子どもや保護者の願いを受けとめ、指導・支援する。 ・特別支援学級の子どもたちの理解を図るために、研修会を行う。	①支援が必要な子どもを含めて、すべての児童が学び合えるユニバーサルデザインの授業作りを考える。 ②すべての児童が、安心して過ごすことのできる学級を目指す。	B	①年間9回のコンサルテーションを受け、授業の中でできる支援方法について学ぶことができた。教えてもらったことを学校全体に周知することで、コンサルテーションを受けていない学級も学ぶことができた。 ②特別支援学級の参観や研修会を行い、特別支援学級の子どもたちについて理解を深めることができた。また、交流学級担任と特別支援学級担任が、日ごろから、連絡を密にし、意思疎通を図ることができた。	①引き続き、専門的な視点から意見をもい、きめ細やかな支援の方法を考えていく。 ②今後も、保護者と連携を図りながら、すべての児童が、安心して過ごすことのできる学級を目指していく。	・個別の子どもたちへの支援を、引き続きお願いしたい。
	教職員の資質向上	①授業力の向上と授業改善を目指した授業公開の実施	①「まず自分で考え、表現する子を育てたい」と対話を通して、児童が「表現力を高める指導の工夫」について職員で研究を深め、授業力の向上と授業改善を目指した授業公開を実施する。	①校内研究授業・事後研究会を年間10回、授業公開を学年が行い、スキルアップ研修会(年間7回)を実施し、授業力の向上を図る。	A	①校内研究授業・事後研究会・授業公開、スキルアップ研修会を予定して理解を深めることができた。また、交流学級担任と特別支援学級担任が、日ごろから、連絡を密にし、意思疎通を図ることができた。 ②保護者アンケートの結果は、95.7%だった。毎14:30にホームページの更新通知をGoogle Classroomで行ったことで、アクセス数は市内17小学校でトップだった。また、自治協議会のブログでホームページを紹介していただくことで、情報発信につながっている。	①児童の実態に応じた授業研究・授業改善を進め、きめ細やかな支援のあり方を考えていく。	・先生方の向上心が伺えることが素晴らしい。

教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備	①学校運営協議会の活動の充実 ②学校情報の積極的な発信	①学校運営協議会と教職員とのつながりを深める。 ②学校だより、学年だよりを月1回以上発行する。 ・学校ホームページを月10日以上更新することによって、学校情報を積極的に発信する。	①教職員の研修に、学校運営協議会委員が参加する合同の研修会を実施する。 ②保護者アンケートにおいて「学校だより・学年だより・学校ホームページ」などにより、学校の様子を知ることができると回答した割合が90%以上になる。	A	①夏季研修のストレスマネジメント研修及び能力向上研修に参加したこと、本校の実態把握を職員と共有することができた。職員と意見交換する場を持つことが次のステップである。 ②校務分掌に、ホームページ担当を新設し、安定して更新を続けること、また、「何のためにホームページを更新するのか」という目的を、繰り返し職員に伝え、職員のホームページに対する意識を高めている。	・地域住民が、学校に関わりやすいように、学校から地域に要望を発信してほしい。(昔の話の聞く会や、環境整備のお手伝いなど) ・学校ホームページや、自治協議会のブログとの連携など、ICTを活用した情報発信ができています。
	安全・安心な教育環境の安否	①防災・安全教育の充実 ②登校指導の実施 ③交通ルールの説明、自転車交通安全教室の実施 ④安全・安心な学校作り ⑤教師としてのやりがいや大切にした業務改善の実施	①火災、防犯、地震の避難訓練を学期に1回実施し、事後指導で、身の守り方を再度確認する。 ②月1回、校区の危険箇所立ち回り確認を実施している様子を確認する。 ③警察の方に、交通ルールのことや、自転車の乗り方など指導してもらい、長期休み前などに、再度学級でも指導する。 ④安全点検を月1回実施し、学校施設や設備の安全・美化に努める。 ⑤夏季研修で業務改善にかかる研修をワークショップ型で実施する。	①さまざまな場面の避難訓練を計画することで、児童がより迅速かつ安全に避難でき、身の守り方について学ぶことができる。 ②危険な場所や、登校の仕方などで気になることはすぐに対応し、全児童にも指導することができる。安全に登校する児童が増える。 ③安全点検をもとに、安全に過ごす環境を整えることで、問題のある場所がなくなる。 ④職員の発案による業務改善を組織的に行う。	B	①今年度は、火災、防犯、地震の避難訓練を行った。避難経路や避難の仕方、身の守り方について考えることができた。保護者アンケートでは「家庭では防災や防犯について話をしていますか?」の項目で80%だったので、保護者への啓発も必要である。 ②安全に登校する児童は増えている。車や自転車が多く通る場所や信号がない場所などが校区にはあるので見守りが必要となるが、今後も指導していく必要がある。 ③長期的な取り組みに継続指導で交通ルールなどの指導をすることで、児童への啓発ができた。 ④安全点検の結果、学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行うことができた。 ⑤新たな取り組みは、1つの学年が試験的にやってみる(先行実施型)を用いたことにより、トライ＆エラーを繰り返した上で、全校実施することができた。	①児童がいざというときに自分で身を守るよう、避難訓練の仕方や形勢について、見直し、改善を行っていく。子どもや保護者にも防災の意識を持ってもらえるように、毎年ランドセルに避難場所などが書かれたカードを入れるようになっている。 ②危険箇所などは、すぐに見に行き、児童にすぐ指導を入れるようにする。 ③引き続き指導と啓発をしていく。 ④引き続き学校施設の安全・美化に努め、不良箇所の改善や報告を行っている。 ⑤メンバーが入れ替わることから、「業務改善に係るワークショップ型夏季研修」を毎年行っていくことが大切である。

学校関係者評価総括

- ・コロナ禍の中でも工夫して、いろいろな行事を前向きに行えたことは評価できる。
- ・具体的施策で、いかに先生方が多種、多方面な取組をされているのかが伺えた。
- ・先生方には、児童が楽しんで受けられる授業づくりを目指してほしい。
- ・夏季研修に学校運営協議会委員が参加し、若い先生が多いこと、若くともリーダーシップを取ることで先生がいることに活性化を感じた。

次年度に向けた重点的な改善点

- ・次の段階として、先生方との意見交換会の設定を望んでいます。
- ・未だ未だ伸び代のある学校だと思うので、これからも楽しみたいです。

自己評価の基準 A: 目標を上回った B: 目標どおり達成できた C: 目標をやや下回った D: 目標を大きく下回った